

親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年によせて

2023(令和5)年にご法要をお迎えするにあたり、今号より、四夷法願さんに連載いただきます。親鸞聖人御誕生の意義、立教開宗が示す意味を、と一緒に味わわせていただきます。

01

親鸞聖人に立教開宗の

意図はなかった!?

「立教開宗」とは「浄土真宗辞典」に、「独自の教義を立てて一宗を開くという意」とあります。ところが親鸞聖人は「高僧和讃」に、

智慧光のちからより

本師源空あらはれて

浄土真宗をひらきつつ

選択本願のべたまふ

と詠われているように、「浄土真宗」という宗義をひらかれた(開宗)のは師の源空(法然)聖人であるとされています。さらに「歎異抄」には、

よきひと(法然聖人)の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

と仰っていることから、「親鸞聖人には立教開宗の意図はなかった」といわれています。確かに聖人の思いからすれば、その通りかもしれません。

しかし、かつてある先生より、「親鸞聖人には立教開宗の意図はなかったが、事実はあった」と聞かせていただき、正鵠を射た表現と頷かされました。つまり、聖人ご自身は新しい宗派をおこす考えは少しもありませんでしたが、一宗を開くだけの十分な事実があったということです。

一般的に立教開宗には(一)宗名、(二)教えの根拠となる聖教(三)仏教における自宗の位置づけ、(四)教えの相承、という四つの要素を明示する必要がありますとされています。

第一の宗名は「浄土真宗」といい、第二の教えの根拠となる聖教は、「大無量寿経」と定められます。第三の仏教における自宗の位置づけは、全仏教を阿弥陀如来の第十八願に摂めていくような「誓願一仏乗説」を打ち立て、浄土真宗を最高の仏教と位置づけれます。

さらに、私たちが浄土に往生して仏のさとりを開く因と果も、すべて阿弥陀如来から与えられる「本願力回向」という独自の教義体系を確立されました。これらの論理が詳しく説かれているのが、主著「顕浄土真実教行証文類(「教行信証」)でした。

そして第四の教えの相承では、お念仏の伝統系譜として七高僧の教えを承けていかれます。元々これら四つの要素は、法然聖人によって説かれたお念仏の教えに対して、当時の仏教界から向けられていた苛烈な批判への、親鸞聖人の対応でも

あったのです。

法然聖人と親鸞聖人は、阿弥陀如来の本願のはたらきによって救われていくという、本質的な部分では一致していますが、その法義の顕し方には大きな隔たりがあります。確かに親鸞聖人ご自身は、法然聖人の浄土宗とは別に一宗を開くという意図はなかったかもしれませんが。

しかし、「教行信証」を著された結果、他の仏教諸宗にはない独自の教義を確立された「事実」を見ると、この書が立教開宗の根本聖典とするに相応しい内容をもっていていることがわかります。

それゆえ、その教えを聞きよるこぶ私たちは、親鸞聖人を浄土真宗の宗祖と仰がせていただいているのです。



しい ほうりゅう
四夷 法願

阪神西組 信行寺住職
1985年生まれ

龍谷大学・相愛大学
非常勤講師
本願寺派宗学院研究員
文学博士

研究分野は日本浄土教、真宗学。今年度から地域情報誌(西宮)の編集に携わっており、地域コミュニティについても関心事のひとつ。